創立60周年記念号

名古屋
石田学園報

第12号　平成13(2001).12.22

名古屋明徳短期大学
星城高等学校
星城中学校
星の城幼稚園
名英予備校
名英図書出版協会
法人本部

座談会

明日の名古屋石田学園を考える

―― 初心にもどり、過去・現在・未来を語る ――

司会(西川) 本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございました。名古屋石田学園創立60周年記念の座談会を開催させていただきます。

本日の議題は、「明日の名古屋石田学園を考える」と題してお話しいただくわけです。それぞれの部門で現在の状況、現在の教育経営に焦点を置き換えて、未来を論じていただくことになると思いますが、できるだけ中身の濃い座談会にしたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、初めに理事長先生よりごあいさついただきたいと思います。

石田理事長 創立60年という言葉を皆さんはどのようにお想いになりますか。信長は「人間50年」ということを申したわけですが、今までは還暦を迎える、というようなことはなかなか難しいことでありましたけれども、それがゆえに、また新たに戻ってくる、ということから還暦などという言葉も作られたのであろうと思います。時代の変遷の速さ、特に、戦後の55年間というのは、驚くべきスピードであります。「ドッグイヤー」などという言葉も使われましたけれども、まさにそう思います。特に、日本におきましては、真に正しい宗教教育だとか、道徳教育だとか、歴史教育がなされず、精神的な支えを失ってしまいました。新聞に時々いろいろなことが出ても、私自身も何が正しいのか、本当の歴史は何か、知らないわけです。また、所得倍増論ではありませんが、とにかくお金、お金、とそういうような肉体的快楽路線で日本がここまできてしまいました。国富論、アダム・スミスの言葉を見ましても、自由経済というのは、皆さんが納得するいいものを作る、皆さんが喜んで賛同されるものを作っていく、そういう自由経済が、自分さえ儲かればいい、人を蹴落として、こういう日本式の経済、更に、明治維新に西洋からいろいろなものを取り入れて、いわゆる和魂洋才、よいものを取り入れるけれども魂だけは日本精神を、というのを、もうまるっきり洋魂洋才と言いましょうか、外国の真似さえしていればいい、こういう時代になりきってしまった、と思います。60年前に創立者は、東洋精神「彼我一体」を目途にこの学校を創立なされました。このことを思うときに、全く、今、その意に反した教育が日本でなされているし、社会状況になっている。本年は2001年を迎え、21世紀を迎え、60周年を迎えることができまし

た。これは、本当に基礎からやり直さなければいけない、原点に帰れ、こういう創立者の声でもあろうというように思います。創立60周年記念事業の四年制大学設置は創立者の大きな目途、意志でありまして、それをこの60周年に文部科学省に申請ができることは本当に嬉しい限りであります。私どもが今まで歩んできた60年というのはまさに創立者の言葉通り、他人に生かされてきた、いろいろな方々に助けられて、支えられてこの60周年を迎えた。ならばこの社会に還元をする、奉仕をする、というようなことから、その意図通り、社会貢献、あるいはまた、人作りということから、事業貢献というような学部、そして、今まで日本を支えてきた先輩諸氏、ご高齢の方々に今後、還元のできる医療貢献と、こういう内容の学部ができることは、誠に喜ばしいことであるし、創立者の意志を継いでいく素晴らしい機会であると思っております。「夢を」ということでありますが、とにもかくにもこの四年制大学が充実した学部、建学の精神の趣旨を十分踏まえた大学にできますよう皆さんに御協力いただきたいと思います。

司　会　ありがとうございました。今、理事長先生から、名古屋石田学園が還暦を迎え、ここからまた新たに出発していく時に、四年制大学設立の心構えのお話をいただきました。続いて、本部長、企画室長に、この四年制大学設立についての経過をお話しいただきたいと思います。

石田（直）　これから四年制大学を創るという中でポイントになってくるのは、やはり施設だとか、建物だとか、そういう時代ではなくなったと思っています。結局、申請書を出すまでは私自身は、形を作るものだと思っていました。ですから、建物を造るのと同じレベルでそこから先、中身をどう作っていくのか、運営をどうしていくのか、そういう部分に魅力のあるものを創らないかぎり、どんなにいい建物を立て、優秀な先生を集めて、これだけ揃えましたよと言っても、学生は集まらない時代だと思います。

やはり、歴史のある大学というのは根強く今も残っていますけれども、そうかといって、新しい大学が伸びていく余地がないかというと、私は逆に大いにある時代にはなってきた、と思っています。ただ、余地のある部分をどう攻めていくか、ということを本当に考えていかないと非常に厳しい時代ではないかと思います。私もこの大学設置のために１年間いろいろな大学、北は青森から南は沖縄までいろいろな大学を見てきました。埼玉の県立Ｓ大学は、この時代に660億をかけて、すばらしい校舎を建てているのです。そういうところと勝負していかなくてはなりません。それから、岐阜のＳ大学というところも、コンピュータのシステムでは私自身もびっくりするくらいの施設があります。京都のＫ大学は、私どもの大学と似た学部で、相当ＰＲしています。入試の状況を見ていると、こんなことまでやっているのかというくらい手を変え、品を変え、いろんな種類の入試を行っています。それぞれいろんなパターンがあって、そういう工夫をされてきているのだけれども、残念ながら学生のほうが集まっているかというと、そうでもありません。だから、本当にこれからどういう内容の大学を作って、どういう形でそれを宣伝し、どういうイメージ付けをしていくかが本当に大事なところだと、それがこれから１年間勝負なのかなと思っています。今の学園のイメージを考えると星城高校はやはり募集というか、学生側から見た魅力という意味でいうと、生徒数、受験者数でこれだけ集められたということは、確固たる魅力を売ってきた一つのパターンの学校だった訳です。Ｃ高校というのは逆に生徒の質という意味では、オール２の子がオール４にこの数年間でなったのだという意味では、そういう戦略をとって成功した学校だと理解しています。星城高校とＣ高校のノウハウを何とか合体させて、次のステップの、この星城高校の飛躍になればいいと思っています。そのことが星城大学の重要な鍵となり、その位置づけというものがポイントになってくるのではないかと思います。そういう意味で、本当に星城というブーム、星城という名前をどう浸透させて、それがいいイメージで、このようになっていくんだ、というものをどうアピールできるかが、この星城というか、名古屋石田学園の生き残りの戦略ではないか、と考えています。具体的に大学設置に含めて今の本部の施設等も順番に大学院にしていく予定をこれから持っていきたいと思いますが、もう大学だけでは駄目な時代になってくると思いますので、次のステップとしては大学院というものを設置していかなければなりませんし、今回、大学設置の中でＫ大学関係者にご支援いただき、この大学設置に協力していただけていることもアピールの材料ですし、企業関係では、日本の大きな会社の実務者が講義を行う「戦略セミナー」という魅力もつくっていきたいです。それらすべてをパンフレットに載せて魅力ある形をつくっていきますので、そういう大学設置を一つの石の転がる一回転目だと思って、それがどんどん坂道を転がって、一大星城ブームを起こしていくんだという思いでこのことを進めていきたいと考えています。

司　会　ありがとうございました。それでは、今村先生はいかがでしょうか。

今　村　名古屋石田学園が創立60周年を機に、四年制大学「星城大学」を創立し、学園として今何を目指していくべきか、その辺のところから述べさせていただきます。

これからの教育機関は、いかに支持してくれる多くのファンを得ることが出来るか、否かにかかっており、そのために、その先にある社会に対し、どんな貢献（奉仕）ができるかについて、全教職員が第一義に考えていかなければならないときにあると思います。

石田学園の中心にある星城高等学校は、ここ数年、愛知県私立57校中志願者はトップを誇っております。しかし、今後の就学年齢層の減少に伴い、このことに安住しているわけにはいきません。この星城高等学校の志願者を新設星城大学の志願者に結びつけるような“星城ブーム”“星城ドリーム”を起こす必要があるわけです。

「星城大学」の星城という呼称に込められた石田学園の歴史と伝統を大切にし、先人の努力の跡を尊ぶということからも、星城ドリームの実現に向け、大飛躍を遂げなければならないと思います。

ところで日々、急速に変化していく社会情勢と先の読めない経済状況の変化のなかにあって、今なぜ大学創設か、その必然性についてすべての教職員がはっきりとした共通認識をもたなければならないことは当然のことと考えます。また大学創設は、一見この時期、無謀のことのように思われがちです。しかし、社会が混沌とした時代背景にあり、私学経営はどこもすべてが剣が峰にたっている今だからこそ逆にチャンスであるということもでき、全教職員一丸となってこの難局を乗り切っていくための決断と一段の努力を惜しんではなりません。

石田学園の全教職員が、今まで注ぎ込んできた思いや情熱をその歴史と伝統にこだわりつつ、さらに新しい「星城」確立のため、今こそ理事長以下の強力なリーダーシップの下、学園全体で可及的かつ真摯に取り組むべき時です。

このような視点に立ち、今回の四年制大学「星城大学」設立に関する説明をさせていただきたいと思います。

この星城大学がどういう趣旨、設置目的で創立されようとしているかをお話しさせていただきます。設置目的は、情報技術とビジネス創成、介護医療への対応であります。これらは言うまでもなく21世紀の日本社会が要請する３大分野でもあります。この時代的、社会的要請に応えるためには、この分野における人材育成こそ、新しい大学に課せられた社会的責務であり、この３大分野における人材育成を目指した「ひとづくり大学」こそが星城大学の設立目的であります。「経営学部」は、21世紀の高度情報社会における情報技術とビジネス創成に関わる人材の育成を目指し、「リハビリテーション学部」は、21世紀の高齢化社会における介護医療に関わる人材の育成を目指しております。大きな３つの理念として、「チャレンジ」「情熱」「思いやり」があり、具体的に「チャレンジ」は新しい事業を起こす能力即ち「想像力」「企画力」「強靭な実戦力」を意味し、経営学部の目標としております。「情熱」は、「豊かな教養」と

「着実な専門能力」そして、「絶えざる自己啓発」を意味し、これはリハビリテーション学部の目標としております。そして大学全体のイメージということで「思いやり」即ち「温かい人間理解（人間的交流）」と「国際的感覚や自然愛へ畏敬の念を持つことのできる人間を育てる」、即ち、温かい人間的交流を通して国内外の人々との人間関係を緊密かつ円滑にし、同時に自然環境を慈しみ自己変革に努めることの出来る多くの人材を発掘するというのが大学の設置目的であります。そして、学生向けの「ひとづくり大学」の実現目標として①自分によくわかる学習方法を身に付ける。②授業や実習を通じて学習することが楽しい自分になる。③授業を通してみんなで共に大きくなる。④諸活動を通して人間としての自分の個性を磨く。⑤全員が就職、進学できるようみんなで相互に支え合う、ことなどを標榜します。この大学の設立に関してはK大学の高等教育教授システム開発センターに支援をいただき、研究モデル大学として位置づけていただいており、K大学現副学長A先生にご指導をいただいております。そして、一番ここで強調しておきたいことは、大学独自のテキストを作成するということであります。星城大学開設の趣旨に鑑み、開講するすべての科目の独自のテキストを作るわけであります。星城大学設立の趣旨に沿った教育内容のテキストを作成するということで、そこに星城大学の特色を出していきたいと思っております。「21世紀に輝く（大学）理想の星へ」というキャッチフレーズの下、「星城」という名前をこの大学につけているわけであり、そういう意味からもこの星城大学に結集される非常に不思議な人間関係の出会いと、その多くの方々の石田学園に対する情熱と熱意を形として現す必要があります。私達は共にその熱意を持って星城大学創設の成功の決め手にしていきたいと思っております。そのためには外形が出来ても中身がないことには多くの志願者は集まってまいりません。これからその中身づくりについて皆様のご意見、ご提言をいただきたいと思っております。

司　会　ありがとうございました。今、法人本部長からは、これからの四大設置は施設や建物だけではなく、中身をどう運営していくかということである、それから今村企画室長からは、趣旨と設置目的についてお話ししていただいたわけですが「社会的要求に答えていくことのできる人材を育成していくことである」というお話であったと思います。大学でのご経験が深い明徳短大の後田先生、畑中先生、北出先生のほうから一言ずつお話しいただきたいと思います。

後　田　今、西川座長のほうから、それぞれの立場で未来を論じていただきたい旨お話しがございました。そのためには、私、過去を改めて確認するということが、非常に大切であると思います。そこで専攻科の学科長といたしまして、このあたり振り返りながらお話しを始めたいと存じます。確かに専攻科自身、短命ではありましたけれども、この専攻科がどういう形で、また背景から出てきたのか、このあたりに触れることは、将来の大学構想のためにも大変重要なことであると思う一人でございます。

私が前の大学、愛知教育大学におりました折り、教授会に平成６年、７年、８年ぐらいの18歳人口の激減のデータ、それに伴う教員養成大学が抱えるであろう問題点が提議されました。この大学は学年1,060名全員が教員養成課程に在籍、その多くが教職希望だったのです。幸い、当時はその８割が小学校、中学校、高等学校などの教師になれました。ところが今申しましたように、平成６、７，８年頃になりますと18歳人口が減ることによって、いくら学生が優秀であっても、要するに需要と供給のアンバランスからくるとんでもない不幸な事態が待っているということが明らかになったのであります。そこで急きょ、教育学部解体と申しましょうか、これを教員養成課程とゼロ免の総合科学課程の２つに分けることにいたしました。その学生比率は６：４でありました。私はその直後、新しい教育課程を作る仕事に携わることになりました。その仕事をなんとか終えた時点で、定年前２年、今から８年前になりますが、こちらの短期大学でお世話になることになったわけでございます。７年、８年後にくるであろう18歳人口激減の時期に、短期大学とて例外ではないとの憂いを持ちながら.....。

ところが当時、わが明徳短期大学のほうは応募者が多くまた競争率も高くて、まだまだ左団扇の時代でした。しかし、今申しましたように平成６年、７年、８年の学生減の実際は刻一刻と迫ってまいります。現在の短期大学の状態でずっと進んでいっていいのか、私にはすぐに四年制大学への改編というようなことが浮かびました。しかし、いろいろ調べてみますと当時の大学設置基準、その他から見てこれは非常に難しいということがわかりました。それではということで一つの便法、専攻科といったようなものを設置し、とりあえずこれを中継ぎにして、なるべく近い将来それを四年制大学に切り替える方向はどうか、が生まれてきたわけです。こうした経緯を持ちまして、６年ほど前に現在の専攻科が生まれたのでした。

ところで、この私どもの専攻科というのは、一般大学で既成概念を持って存在していたそれまでの専攻科とは異なり、言ってみれば四年制大学後半３，４年の専門課程に相当するものであったわけです。そして、文部省外郭団体であります学位授与機構というところが、学生の業績に基づいて学士号を授与するという、まさに画期的な学科であったわけです。ですから、その誕生が英語科はこの地区で初めて、国際文化科は全国でも初めて、というような結果になったわけでございます。

余談になりますが、この学位授与機構というのは評価が大変厳しいところでありまして、学位授与機構に関わる教授方が、学生の専門・専攻分野に関しましていろいろな筆答試験を課し、それを採点。また、学生が提出する学位授与のための論文も審査いたします。それは本当に厳しいものだと思いました。例えば、論文で不合格になりましても、どこがどのように悪いと言うような具体的な指摘は一切なく、ただ「学士号授与のための論文としては内容が不十分」といった具合なのです。ですから、私など、こうした形で授与される学士号、一般の大学のそれに比べ、その価値は掛け値なしに立派なもの、遥かにそのレベルは高いと思っております。

しかしそんな折り、18歳人口の激減に加えて生徒の短期大学離れ、四年制大学志向という傾向が急速に出てまいりました。これが、これからという専攻科の発展に大きな逆風となって前に立ちはだかったことは言うまでもございません。このため、当初予想していたよりも学生の数は伸びませんでした。徹底した少人数教育にはよかったのですが.....。しかし、修了生が多くは大学院進学などを果たしたり、社会にそのところを得て大いに活躍していることなど、私どもにとりましてこの上ない慰めになっていることも事実でございます。

ただ、時代の趨勢とはいえ、これが10年を待たずして、四年制大学設置に絡んで消えていくということは、いろいろな意味で寂しいかぎりでございます。ここで改めまして、今日ここに至った、あるいは至りつつあるその過程において、短期大学の先生方、事務職員の方々、あるいは後援会の皆様方、あるいはその他関係各位に多大なるご指導、ご鞭撻をいただきましたことに、心から感謝いたしたいと思っております。

１年後には素晴らしい四年制大学が誕生することでしょう。その四年制大学が先を見るばかりでなく、こうした短期大学、専攻科の歴史の上にあるのだ、過去があるのだということに心し、その上に立ってその将来像を模索・構想、それに伴う大発展をご期待申し上げる者の一人でございます。こんなことを思いながら、私の、未来を語ること、終えさせていただきます。ありがとうございました。

司　会　北出先生、お願いします。

北　出　いろんな思いがあるわけですけれども、50周年記念の時が、短大が開学して2年目だったと思います。御園座で祝賀行事がありまして、非常に緊張したというか、晴れがましい思いで出席させていただいたのを覚えております。それから10年たちまして、特に私、平成３年からカリキュラムを改訂してよろしいという時に、教務委員長という役をやらさせていただいていました。非常に言いにくいのですが、貴重な体験をさせていただいたと思うのです。今おっしゃっている理想の大学というものが私にもやはりあります。それから現実の存在していかなければならない大学というのも一方にあるわけです。ここのジレンマというのは大変なフラストレーションになっていて私たち全教員が抱えているのです。いったいどうなるのだろうという気持ちと、しかし、新しい大学を絶対成功させなければいけないということで、今、本部長のお話

は全体の像、ハード的なものができたという意味だと思いますが、やはり、これを動かしていくのは人間であって、それを具体化していく、一番大事なところなのです。理想を掲げるのは非常に簡単なのですが、それを実際にやっていくこの人というのは、やはり非常に大切だと思います。私たち教員は、やはり教育効果、それから研究業績だと思いますけれども、そこのところでもっと具体的に意志統一をする、ティームティーチングという言葉もありますし、ファカルティ・ディベロップメントという言葉もあるわけですが、教育に対する研究をもっとやって、教育効果をあげる、例えば、TOEICで何百点以上というなら実際にそうしなければ駄目なわけで、社会に対して嘘をついていることは絶対駄目だろうと思っております。それからもう一つは、やはり旧態依然といっては言葉が悪いかも知れませんが、ある意味では理想の大学であるヨーロッパ型の大学を目指してずっと生きてきた我々が直面した問題は結局こういうことだったということですから、やはりある程度現実を見ていかなければならない。現実的なことばかりを申し上げて、申し訳ないのですけれども、こういう意味では教員の意識改革というものは、実際、言葉で言うのは簡単ですけれども、これがどれだけできるかということがやはり重要であると考えています。

司　会　畑中先生、お願いします。

畑　中　私は、英語科に所属しておりますが、この英語科ができたのは平成元年、1989年ですので、創立50周年から60周年に至る10年間というのは、まさに英語科が成長・発展してきた10年間ととらえることができると思います。そこで10年間を振り返ってみますと、英語科で最も基本的に取り組んできたことは、簡単な言葉で言いますと、本物の英語力を身につけた国際人を育てるということ、これが一つの眼目ではなかったかと思うのです。それは、創立者の言われております、例えば、世界観の確立、そういうことにつながるねらいであったと思うのです。ですから、明日の名古屋石田学園というのも、基本的にはそういうところでおさえていくべきではないかと思います。ただ、国際人という言葉は、簡単に我々は使うわけですけれども、非常に難しいことだと思います。実は、大学へ来まして初めて高校生、星城高校の３年生の授業を担当させていただきました。それは、「国際事情Ｂ」という科目だったのですが、そこで高校生といろいろ話をしながら学習を進めていきましたけれども、その中で、国際的な諸問題、あるいは国際的な相互交流、そういうものについては、我々が若かった頃に比べてもそれほど進んでいないという感じを持ちましたし、うちの短大生の場合も同じような状況です。ですから、社会には国際的な情報がまさに満ち溢れている。満ち溢れているのですけれども、意外とそういう国際的な理解とか、国際的な交流を進めていく上での基本的な姿勢とか態度というものが今の若い人にはまだまだできていない。例えば、国際交流をやっていくためには、やはり自分の国の文化というものをよく理解しなければいけないし、あるいは、互いの違いというのを分かり合う、違いを知り合う、ということが基本的に国際的な交流だと思うのですが、そういうセンス、言葉を変えますと、共存共生という、そういう感覚がもっと、もっと育ってこないと、どんなに英語の力がついても本当の国際人にはなれないんだよ、ということを私は英語科ではしきりに言っているのですけれども、将来の名古屋石田学園の方向としても、やはり、本当の意味での国際人を育てていく、そのことが一つのポイントになるのではないかと思います。もう一つだけ申し上げますと、高校生も大学生も同じだと思うのですが、よく若い人が使う言葉に「居場所」というのがございます。「居場所がある」とか「居場所がない」ということをしきりに言います。何か自分が主体的に関わって物事をやっていると「居場所がある」わけですけれども、単なるお客さんとして座っている場合には「居場所がない」、そういう言い方をする。今、我々の大学ではアドバイザー制度をとって、学生と教員とが個人的にいろいろ話し合って、自分探しとか、自分の居場所を見つけることをやってもらっているのですが、なかなかそれが難しいことなのです。自分というものが分かっていないと言いますか、自分が確立されていかない、そういう状況です。これからの名古屋石田学園の中でも、本当に強い自我が確立された若者、そういう若者

が育ってほしいということをしみじみ思っております。英語科という問題から、ちょっと広がりすぎましたけれども、そういうことを今考えております。

司　会　ありがとうございました。三人の先生方からは非常に貴重なご意見をたまわりました。四大設置も構想ではなくて、すでにスタートしているわけです。これからはいかに生徒を募集していくかという方向に観点は変わっていくかと思います。その一つの大きな問題としては、やはり星城高等学校からいかに生徒を送るかという問題があるかと思いますが、高等学校のほうで柴田先生、東先生あたりから今のお考えをお伺いしたいと思います。

柴　田　私は、実は公立学校に17年おりまして、それからこの学校にきまして35年ですから教育現場には50年を越しているわけです。そのうちで公立学校のときはもう完全にペーペーの教員として一科目を黙々とやってきた方なのですが、星城高等学校に来まして、来た理由というのは、やはり鏇徳先生の人間性にとても惚れ込みまして、鏇徳先生が、私たちは生かされているのだよ、というようなことをその頃から言ってみえたわけです。私、本当は自分自身はこちらの学校のお世話になるつもりではなかったのですけれども、仲間と一緒に鏇徳先生といろいろ話しているうちに「ところで君もどうだ。」と言われたことからこちらでお世話になることになったのですが、その初めての年に、聞いてみますと10名の先生で始まったらしいのです。ところが、私はその中で７名の先生が非常に記憶があって、これから７人の侍でこの学校はやっていくんだなと、東にある東海高校、そういうのを目指してやるんだ、ということを鏇徳先生がおっしゃってみえたのを記憶しているのですけれど。当初に入ってきた生徒を見ますと、私は非常に質のいい生徒がいたなと思っております。ところが、２年目、３年目は生徒が非常に順調に集まっていたのですが、４年目になってガタッと生徒が減ってしまった。鏇徳先生が「先生、どうするんだ。」という話から、「先生はもと公立に行っていたのだから、多少何かの役に立つから、生徒募集をやってくれんか。」という話から募集のためにこちらにきたような感じになってしまったのです。でも、初めの10年ぐらいは、授業も18時間人並みにやって、これは佐竹という教員がおりまして「お前、授業がまず第一だぞ。それからでないと募集に行くなよ。」といつも言われていたものですから、授業を優先していこうということで、３時過ぎてから、いわゆる生徒募集に出かけて行って、そのために毎日、毎日が追われているような感じで、私がその時思ったのは、やはり、人というのは、人の心をとらえて、そして自分の心を知っていただくことによって、非常にうまくいくんだなということがよくわかりまして、とにかく星城高等学校の生徒をまず増やさなければいけないということで、いろいろ一生懸命やりまして、40周年になる星城高校の生徒の動きを見てみますと、当初は名古屋とそれから岡崎方面と半々だったのです。それが、いろいろな環境の変化というのか、もう名古屋から全然来なくなる、岡崎もどんどん減ってくる、もう、やはり別なところでとらざるを得ないということで、知多半島がまず一番初めのターゲットになった。というのは、私自身、知多半島にいましたものですから。それで、知多半島をぐるぐるまわっているうちに、なんとかしてやるということで、その頃は非常に協力していただいた。やはり、生徒募集というのは、先生と先生、人間と人間の関係だなということがよく分かりまして、とにかく私の誠意をそれぞれの学校の先生に知ってもらって、とにかく、今、星城高校は一生懸命やっているんだと、これをひとつ評価していただいて、生徒を送ってくれ、というようなことから始まりまして、ずっと長年続いてきたのです。それで、私、今思ってみますと、ここ数年、愛知県でトップの受験者数があるというのは不思議でたまらないのですけれど、やはり、これは中身もどんどん、どんどん良くなってきたんだ、そういうことが言えると思うのです。先生方が非常に熱心だな、そう思うのです。それで、私、教え子もたくさんおりますので、本当は私、ここを辞めるときに生徒に一言、言っておきたいなと思ったことを今日、ここでお話しして結びにしたいと思うのですが、それは何かといいますと、私の教え子が初めどんなことを言ったかと言いますと、「先生、僕らが先生が一生懸命に言うから何と

かしてやろうと思って、『おい、星城行けよ』と言うと『星城なんかいやだ』と言う。」と。それがしばらくたって、また何年かたてば、サイクルでその先生も３年生を持つものですから「おい、星城行けよ。」と、こう言ったら、「そうだったな、考えてみるわ。」と、こういうふうになってきたのです。で、またサイクルで３年生を持って「おい、星城行けよ。」と言ったら「じゃ、行こうかな。」というふうになってきた。で、またサイクル、３年を持ってみますと、生徒のほうから「先生、星城行きたいけど、どうだろうか。」というふうになってきた。そして、今はどうかと言えば、もう、とにかく星城高校という名は、親も子供も保護者会の中でも出てくるようになった。「先生、本当にいい学校になったね。」と、そう私に言ってくれたのです。私、本当に嬉しかったと思うのです。それがそのままこれから進んでいってほしいなと、そう思っております。以上です。

司　会　それでは、東先生お願いします。

東　私も柴田先生と同じように、途中から星城高等学校に参りました。星城高等学校に来て、一番びっくりしたのは、男子校と聞いていましたから、相当校舎も荒れているのではないか、汚い学校ではないか、という先入観を持って来ました。来て、正直言いまして、びっくりいたしました。本当にいき届いて、隅々まで、まあ、大体トイレを見ると分かりますけれど、ちょっと考えられないような、徹底した清掃がなされている。校長先生がしっかりされているとつくづく思って帰ったわけです。入ってきまして、本当に皆さん職員は一生懸命やっている、そういったことをいろいろ考えたときに、これから先、名古屋石田学園というのは、やはり、これを作り出すのは我々職員であると、職員が喜んで働けるような、先ほど明徳短大の北出先生が言われましたように、我々石田学園の中の人作りをまずやっていかなければならないのではないかなと。例えば、いろいろな言葉で意識の改革と言いますけれども、非常に難しいですけれども、これをやらないことには、星城の発展ということは見込めない。城を造っているのは石垣ですけれども、その石垣は部下一人ひとりが石垣になって、城は建っているのではないか。やはり、しっかりとした石垣を造ることがまず一番大切なことではないか、と、今は、そう思っております。大学につきましては、形はどんどん、どんどん、進んでいますが、私が一番今、心配しているのは、先ほど、まだこれからだと、今は形を作るのが精一杯だと思いますが、募集というのは非常に厳しいのではないかと、これは皆さん考えられておられるのではないかなと思います。やはり、申請をして、それから、じゃ募集はどうするかというような体制では遅いのではないかと。それは同時に始めていてもちょうどいいくらい、それだけやはり募集というのは厳しいものがあるのではないかと。それゆえに、早め、早めにやっておかないと来年度に間に合わない。そういった意味からしても、これからは機会ある毎にどんどん、どんどん宣伝をしていかなければならない。そういった意味では、一日も早くそういうしっかりとした募集体制を作って、前に進んでいかなければ、と思っております。極端なことを言えば、まだうちの職員は中身はほとんど分かりませんから、やれ４月になって、実際に生徒に何と言うかと言うと、まず職員が知らなければ生徒にも伝えられません。職員の指導が求められる。説明もやらなければならない。それと子供の進路はもう６月、７月になると、およそどうしようかなというのは、当然考えますから、もう新学期から取り組みを、我々が大学側にやはり申し上げるとすればそれをやってほしいな、というような希望はもっております。そうすると、学校としても、星城高校としてもできるだけの確保はしたいな、と。もちろん、こちらからいろんな質問をまたぶつけるかも分かりません。そういったものをお互いに話し合ってやっていけばいいのではないかと思っています。それと、そういう形を作るもの、時期的に難しいかも分かりませんけれども、それと合わせて募集体制は早めに作っておいていただきたいということを大学側に希望します。以上です。

司　会　ありがとうございました。高等学校からは新しい大学と星城高校とが、先ほど北出先生のお話の中にあり、また東先生にもご指摘をいただきましたが、教員の意識改革、意識統一をはかって、そして早い時期に募集体制を作っていかなければならないというお話であったと思います。ここで大学新設については一応ここまでにしておきまして、星城高等学校は、来年度40年周年を迎えるわけです。そして、一昨年から2011年委員会を中心とした将来構想をはかってきているわけですが、「星城高等学校の明日を語る」ということで、菅原先生何かご意見いただければと思います。

菅　原　私は今年からこの星城高校へお世話になっているのですが、なかなか全体をつかんで的確にというわけにはいきませんから、年度の初めからの印象みたいなものを簡単に述べさせていただきます。実際、生徒数が今、2500ぐらいです。専任の教員が130、非常勤が80という規模ですから、これは、平均的な公立高校なら約３校分の規模があるわけで、本来、雑然と落ち着かない雰囲気があっても不思議ではないのですが、本校の場合ですと逆に、それだけの規模でも大変落ち着いた安定感があります。これはどこかくるのかということで、いろいろ考えてみたのですが、やはり一つは、生徒が比較的おっとりとしたおとなしい生徒が多い。生徒もそうですし、保護者も期待を持って本校に来ている。家庭も地元の中学校も期待をもって子供を本校に送ってくれているという状況があります。非常に強く、エネルギッシュというわけではないですが、全体の生徒には意欲を感じます。これがやはり落ち着いた雰囲気を作っているのかなと見ています。それからもう一つは、本校の職員が比較的穏やかで円満な教職員が多いわけで、生徒に接するときも非常に家族的に接していますから、そういう意味ではギスギスしないという感じがあって、大変いい雰囲気があると見ています。ただ、いい面ばかりではないものですから、やはり私としては、今この雰囲気が失われないうちに、保護者や生徒の期待に積極的に答えていく努力を、学校あるいは我々がしなければいけないのではないか、といつも思っています。つまり、せっかく入ってくれた生徒をがっかりさせてはいけないという気持ちが非常に強いです。それから、もう一つはやはり、これは建学の精神をてこにするということでしょうが、子供たちの心を耕して、付加価値を高めて送り出す、そういう努力を全教職員が一致してやっていかなければいけないと思うのですが、個々の生徒にどうやって自信を持たせて送り出していくか、そのことが星城高校の社会的な評価を高めるということになると思いますから、急がばまわれですが、いい教育をきちっとすれば、星城高校の評価が高まって、いやでもまたいい子が来てくれる、たくさんの生徒が来てくれるということにつながっていくのではないかと思いますから、先ほどの話にも出ていましたが、その場合もやはり、一にも二にも人だと思いますので本校の先生方に、一致してみんなでやらなければ駄目だとか、あるいは共通理解ができなければ駄目だと言っているのではなくて、まずやれるものからやるという意気込みで、やはりせっかく入ってくれた生徒をがっかりさせないようにという取り組み、これを強めていきたいなと思っています。なんだか感想みたいなことになってしまいましたが、そんなことを感じています。

司　会　ありがとうございました。片桐先生、お願いします。

片　桐　ここに来て９年目ですが、最近感じたことを申し上げたいと思います。推薦入学者の面接をつい先日保護者同伴で行いました。私は40名あまりを担当いたしましたが、保護者の方々が、子供さんを本校へ送り出した要因は、生徒指導がしっかりしているからということでした。『この学校の生徒指導の厳しさは中学校の先生からも聞いているし、外の人からも聞いています。最近は自由でけじめがついていない学校が多いことを耳にしています。本校の指導方針には全く賛成です。』という言葉が殆どの保護者から聞かれました。中には三河の方から来られたあるお母さんは「募集の時に、他の高等学校

から来られた先生方は、『とにかく来てください……。』という説明だけでした。ところが、本校の先生の説明は、『ルーズソックス、こういうものをはく生徒は来ていただく必要はありません。』とはっきりとおっしゃいました。私はこのことを聞いて、直ちに星城高等学校に娘を行かせることにしました。」とおっしゃっていました。つまり、今日の星城高校の社会的な評価はまさに建学の理念そのものが、先生方の共通理解の中で実践されてきた、この一語に尽きるだろうというふうに感じました。生徒ももちろん安定感がありまして、なかなか難しい生徒が入ってきているということを先生方から聞いておりましたが、私はむしろ100％安定感のある生徒だとこういう感じをもちました。そういう点でこれからの星城高校をどうしていったらいいのかというところに思いをはせた場合に、やはり建学の精神を推進していくことの一語につきると確信いたしました。そして、今一番必要なことは、建学の精神の４本柱、礼節、進学、スポーツ、国際交流、どれをとってみても、これが星城だ、ということがきちんとわかりやすく伝わるような具体的にイメージ化されたものを早急に作る必要があると思いました。そして、その一つのスタートとして、学園の周年記念事業を位置づける必要がある、と感じました。それから、今、一つは、地域に愛される学校作りというのが非常に重要でありまして、これは、募集にもつながってまいります。そういう点で、社会貢献のできる生徒の育成という観点から、地域社会との連携を組織的、系統的に本校で立ちあげていく必要があり、来年度の校務分掌では、新たにその項目を設定して、教員を配置いたしました。

司　会　ありがとうございました。お二方の先生には入学してきた生徒をいかに育てて、星城高校の評価を高めていくか、保護者にも安心して生徒を送っていただき、建学の精神のイメージを伝えていくというお話であったと思います。一方、中学校は中・高一貫教育ということで、いろいろ進めていただいておりますが、石田中学校校長先生お願いします。

石田（英）　今、教育改革という言葉をよく耳にするわけですが、要は金属疲労と一緒で長年同じことをやっていますと、マンネリ化してくるものです。学校教育にも同じようなことが言えるのではないかと思います。画一化、同質化という悪平等の中に、教育の荒廃が進んできている現状を目にするわけですが、躾の問題、家庭の教育力の低下が叫ばれている中で、中央教育審議会から「生きる力」とか「ゆとり」とかが出されてきたと思います。学校では当然躾について教えますが、基本的にはやはり家庭だと思うのですが、その家庭の力が今本当になくなってきた、そんな社会状況であると思います。その意味で中学校としてもいろいろ考えていかなければならないわけですけれども、具体的には、学校５日制とか総合学習の導入など、初等・中等教育の場はいろいろな形で様変わりをしてきています。そこには、保護者のニーズ、生徒のニーズなどがいろいろ変化しているからこそ、出てきているのだと思いますが、私学ですので、そういったところを他の私学、公立も含めて、差別化をしていくことが、私どもの学校のある意味では生き残りの一つではないかと思います。

差別化という言葉は、よく言われるのですが、私なりに保護者のニーズ、関心がどこにあるかと言いますと、一つは、建学の精神、学校の経営理念がきちんとしているかです。そこに保護者が「ここの学校はいい校風だな。」あるいは「厳しさがあるし、その中に親しみがある。」とかそういう安心感を持つと思います。二つ目は、教育の内容です。授業に興味を持ち、そこから意欲が湧いてくる、そういういい授業をしているかどうか。三つ目は、将来ビジョンです。この度四年制大学ができますが、そこの学校に入ったら将来きっとこういう形で育ててくれるな、出口のところで付加価値を付けて進路指導もきちんと明確にしてくれるかどうか。四つ目は、環境と施設です。どういう場所で学校生活が送れるか。という四つを考えたわけですけれど、こういった所に視点を当てながら、「選ばれる学校」として、いかに内容を充実して、生徒の不安材料を取り除きながら学校のイメージを向上させていく姿勢が大切だと思います。

もう一つ申し上げますと、競争原理という言葉です。これは私学同志のことだけではありません。公立との競争も出てくるようになりました。これはご承知のように公立による中・高の６ヶ年教育の計画が出てきてますし、通学の区域が広範囲になります。これは今まで公立にはなかったことです。また、学校５日制の問題もあります。公立が私学の真似をする部分と、逆に、私立が公立を真似るような部分、いろんな形で今出てきていると思いますが、中学校は義務教育ですので、ここの辺りはきちんと踏まえておく必要がありますけれども、ここでも選ばれる学校、あるいは差別化、そんなところをいかにしていくかといったところが大切になると思います。学校５日制については、授業の時間数のことがありますが、５日制をやっていては負けると思いますので、違う形で特色を出すことが必要です。あとは学校の行事関係です。これもやはり、情操教育の観点から選択してやっていく必要があります。

それから、先ほど柴田先生が言われましたように、高等学校がここにできた当時の高校への進学率は約50～60％、そして現在は90％です。中学校の場合は義務教育ですから当然100％中学校に行くわけですが、小学校卒業生の中の３，４％しか私学に行かない現状です。どういう形で選んでもらえるかというところがあるわけですけれど、うちの学校だけが私立学校はいいですよ、と言っても、90数％は公立へ行くわけですから、一校で頑張るより私学全体が集まった方がよいわけです。愛知県の私学協会では、高等学校の募集は２対１で動いていますけれども、中学校ではそれがないわけです。今年初めて進学フェアというものを私学協会の中学校部会で行ったわけですが、そういう場を使っての私学のＰＲも片方ではやっていく必要があるのではないかと思います。

最後に、明日の名古屋石田学園を考えるというテーマですが、中期的に考えて中学校、高等学校、そして四年制大学ができるという、この学園の総合力がいい意味で発揮できる10年にきっとなるであろうと思います。そのために今、私たちが一生懸命やらなければなりませんし、名古屋石田学園全体が社会的な良い評価を得るための努力を惜しみなくする、これしかないと思いますので、10年後を楽しみにして頑張っていきたいと思います。

司　会　ありがとうございました。宇佐美先生、幼稚園は創立30周年を迎えるわけですが、いろいろ新しい企画、満３歳児教育の新設、預かり保育の充実というお話がありますが、他に何かお話がございましたらお願いします。

宇佐美　今、出生率の低下と働くお母さんの増加が幼稚園の就園率を下げています。一番近い保育園が定員オーバーしているのが現状です。そのような中でも働くお母さんでも、幼稚園に入れたいというニーズがあります。先程、英城先生がおっしゃったように、これからは選ばれる時代かなと思います。その時に選ばれる幼稚園でなければいけない。ただ私は「建学の精神」が有る限り、その実践をしていく限り選ばれる幼稚園になると信じています。そのためには職員の意識の問題、体制の問題などいろいろこれからも考えていかなくてはいけない問題もあると思います。働くお母さんに対するサポート、安心して任せられる幼稚園として社会のニーズに応えていきながらも名古屋石田学園の星の城幼稚園を確立していかなくてはならないと思います。保育時間外の受け入れ、早朝、放課後、土曜日、長期の休みなどの受け入れも考えていきたいと思います。また、愛される名古屋石田学園、愛される星の城幼稚園になる為に地域への貢献も考えていかなくてはなりません。今、地域の教育センターとしての役割も求められていますが、母親予備軍への教育、母親になるための教育、園庭解放、などいろいろな機会を設けていきたいです。これからも地域へ開かれた幼稚園を目指していきます。

司　会　ありがとうございました。特に保護者、お母さんに対するＰＲを強化していくということも大事なことかと思います。予備校は、オープンカレッジの状況、新企画ということで、お話を。事業部は収益事業としての役割、今後の事業展開ということで進めていっていただきたいと思います。

それでは、それぞれの部門より、現状を踏まえて、今後の方向性についていろいろお話をいただきました。まだまだお話は尽きないと思いますが、今後、皆様には大きな夢の実現のために、決断と実行の精神で、学園発展のためにご尽力をいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

学園の歩み ― 沿革 ―

明 徳 学 舘

私塾明徳学舘が石田鏃徳により創設されたのは、昭和16年９月のことである。場所は、名古屋市昭和区佐渡町３丁目（現在は瑞穂区）。

この明徳学舘の目的は「父兄各位の熱望に応え、一つは学業を興味ある実生活たらしめ、生徒諸君に学業の自信と将来の光明を与え、一つは将来上級学校入学試験の準備対策となさん為」と当時の入学案内「明徳学舘修学部学則並ニ入学案内」にある。

特色として同書に「教科書中心、教科精撰、学術の向上・特性の教化、映画教育、設備完全、校舎新築、環境閑静、交通至便、健康地帯」とあり、この案内書によって一時は約100余人の生徒も集めたという。その指導内容は、上級学校に進学するための英語・数学・国語の学力養成で、特に教科書の基本を徹底的に理解させることによって、基礎学力の充実をはかることを目標としていた。授業の編成は、英語高等受験科（個人または数名のグループ指導）、昼間部（各学年程度によるグループ指導）、夜間部（中学１年、中学２・３年程度の２組に分け、英語・数学・国語・漢文等の指導）の３部にわけられていた。

学力の増進を図る一方、その徳性の陶冶、品性の向上等、父兄と緊密な連絡の下に十分監督指導を行うとし、訓育の徹底をした。そして「修練部」を設け、毎日曜日に心身の鍛練、名士の講演を行い徳育を中心とした人間教育にも力を注いだ。

なお、遠隔地から通学する生徒のために、専門の修練道場を持つ宿舎・明徳学寮を設け、入寮生に対し、生活の指導も併せて行った。しかし開校間もなく第２次世界大戦がはじまり、深刻化する戦況と生徒の動員、食糧難の中で運営してきた明徳学舘も、昭和19年７月、やむなく閉舘に至ったのである。

創立者石田鏃徳の力と意欲をもって教育の世界に身を投じた明徳学舘は、戦争により一時中断こそするが、終戦後の昭和20年12月には名古屋英学塾を開校し、その後名英図書出版協会、星城高等学校、星の城幼稚園と次々に開設し、幼児、青少年の教育に力を注いだのであった。創立者急逝後も、先生が掲げていた教育構想・理念は繁栄され、踏襲されて今日の名古屋石田学園へと成長したのである。

昭和16年９月　私塾明徳学舘設立（名古屋市昭和区佐渡町３丁目）
　　英語高等受験科・昼間部・夜間部
昭和19年７月　戦況悪化のため閉舘（20年空襲により焼失）

名英予備校（名古屋英学塾）

名古屋英学塾の前身である私塾明徳学舘は、第２次世界大戦の激化に伴い昭和19年７月、閉校された。ところが終戦の翌20年12月、創立者石田鏃徳は名古屋英学塾を創設したのである。

設立の趣旨を一言で言えば、「欧米先進国に学ぶべき多くの問題を、如実に受け入れるためにまず言葉を理解することが先決である。」という考えを基本に、英語学習の機関として創設したものである（『塾生と共に』第３集）。

したがって、英学塾で最初に設けられた課程は「英語科」である。創立当初は、戦災から焼け残った工場を借用、それを仮校舎として授業を行ってきたが、入校希望者に応じきれなくて中区仲之町の現在地に新校舎を建築することになった。終戦直後で物資が極端に欠乏していた当時、校舎を建設することは至難のことであったが、創立者の人柄と教育に対する情熱に感銘した後援者が現れ、その協力によって新校舎ができた。昭和21年のことである。

22年４月、創立者は「英語教育の目的」という文章を書いている。その中で「吾人が英語を学ぶのは言葉そのものを知るのが最後の目的ではなく、これによって英米先進国の道徳科学その他あらゆる泰西文化の内容を理解し之を摂取して、一はわが人格修養の資とし、一は以て文化国家延いては世界国家建設という人類最終の理想実現に寄与せんが為であります」と述べている。さらに、創立者は、我が国古来の東洋道徳と新しい西洋の倫理観の融合をはかり、新しい日本を築くべき青少年の育成を使命としていたのである。

昭和23年に愛知県の認可校となった翌年、英語科に会話科が新設された。そして25年には英文タイプ科が設けられ英学塾の名に相応しい各科が設けられた。

昭和26年、学校法人の認可を得、英学塾の教育にも公教育の一翼を担う実績と責任が生まれた。28年４月には、塾生の強い希望もあって「大学受験科」が開設された。創立者にしてみれば、明徳学舘の修学部の精神が閉校後10年を経たこの年に再び花を開いたことになる。33年には、名英大学予備校という校名のもとに生徒募集が行われ、35年には現在の名英予備校として大学進学のための教育が実践され今日に至っている。

また、昭和30年には補習科が設けられ、中学生と高校生のために英数国の指導を中心にした実力養成教育が実施され、英語科を中心に大学受験科と補習科という三本柱を軸に青少年の指導が行われ、社会の要請と期待に応えることになった。

教育の公共性と生徒のためになることを常に考えていた創立者は、遠隔地から来ている生徒のためと、寮生活を通じて人間教育を実施しようと考え、学寮の建設を始めた。34年に南風寮を、以後隔年に三つの寮を完成した。建設が終わったのは昭和40年のことである。

昭和44年、生徒の減少にともなって補習科とタイプ科を廃止することになった。英学塾創設以来、中核であった英語科も数年前から会話科だけを夜間部に残す状況となり、実質は名英予備校が経営の中心となった。この年、創立者は、名英教育の三原則として「誠実」「堅実」「充実」の三実主義を主張し、名英予備校の教育を充実発展させようとした。それから５年、49年には会話科の生徒募集も停止し、完全に大学進学のための予備校として、人間性と学力の育成を目標とした教育が行われてきたのである。それ以来25年、名英予備校の名のもとに、創立者の偉業は脈々と継承されている。ここ２、３年は18歳人口の減少という時代の波を受けつつも、生涯学習講座の開講や、高等学校への出張授業など、大学受験科中心の予備校からの脱皮・転換をはかっている。

名英図書出版協会

昭和20年12月、創立者石田鏃徳は、「今後の日本人は世界観を確立し、大局的な立場からの展望が必要である。それには、まず国際語である英語教育の普及から」と、名古屋英学塾を開設した。当時、英語教育の場はまだ少なく、多くの中学校・高等学校の先生方が授業の参考にと本校に通学された。外国人直接の指導に評判もよく、また毎日配布されるプリントを、自分の学校の教材に使用したいから分けて欲しいという要望もあり、「お役に立つなら印刷してお分けいたしましょう」ということから本協会の発足をみたのである。

昭和22年４月、名古屋英学塾に編集部を設け、文法、作文、解釈のテキストを中心にその他発音教本、実用英会話、物語等14点を出版し、教育現場で広くご活用いただくことになり、効果的な徐行の展開がなされたのである。

昭和26年10月、学校法人石田学園の認可を受けると同時に、教材編集部門を独立させて出版部を設置した。

昭和27年11月、第１回東海三県中学校英語弁論大会を開催し、平成13年度で第50回目を数えることとなった。この間昭和34年第８回大会は、伊勢湾台風のため中止となったが、本大会に出場した弁士は延べで3,400人を超え、本学園を会場として熱弁を振るった学生たちは、立派な社会人として活躍している。創立者石田鏃徳がその生涯で残した業績の中で、それほど目立たない偉業の一つが東海三県中学校英語弁論大会であるが、この大会は中学生英語弁論界の輝く灯台的存在となっている。

昭和28年10月、収益事業として、名英図書出版協会を設立し、会長に石田鏃徳が就任した。さらに、同年印刷部（宝印刷）を設立し、出版物の増版を進めた。

昭和30年代には、英語発音の解説、英単語頻度集、高校用教材として、英文解釈、英語構文集、文法書等の出版を重ねて教材の充実をはかり、北海道から九州に至る各地の中学・高校を直接訪問して、直販の基礎を固めた。

昭和40年代には、英語教育の主要領域として、Hearing Abilityの重要性が年々高まり、全国の高校入試にもヒアリングテストが導入されるようになった。それに伴い、日常の音声教材開発にいち早く取り組み、現場の多くの先生方に支持され、現在の主要教材に受け継がれてきている。

昭和50年12月、石田鏃徳会長が急逝し、翌51年名英図書出版協会会長に石田正城が就任した。出版物は主として、中学校の英語教科書を参考として編集したワークブック、ドリル、テスト等が中心となり、教科書の改訂に合わせて教材を出版し、直接学校販売から代理店を通した販売活動に切り替え、業務の効率化をはかってきた。

昭和55年２月、機関誌MEIEI ENGLISH REPORT（名英レポート）を刊行し、英語教育の実践的な資料や研究成果をご寄稿いただき、無償配布で広くご愛読いただいた。平成９年２月には第50号（記念号）を発行し、平成12年（2000年）からはインターネットで発信している。

平成10年８月、永年調査・研究を続けてきた小学校英語学習の集大成として「みんなでＡＢＣ」（音の出る絵本）を発表、2002年の「総合的な学習」を見据えた、21世紀の提案をいち早く行った。

平成12年度には、出版点数60点、全国に代理店250店、5,000以上の小学校・中学校・高校を対象に販売活動をするようになった。また、マルチメディア時代に対応すべくＤＴＰ（Desk Top Publishing）も導入して、よりよい教材の提供と年間行事である英語弁論大会等の実施を通して、新世紀の英語教育に貢献すべく努力を重ねているところである。

星城高等学校

創立者石田鏃徳は、戦後物質文明は満たされてきたにもかかわらず、青少年の精神的な未熟さに憂いを感じ、まず彼らの人間づくりをする教育の場の必要性を実感したのであった。そこで教育目標と構想を揚げ、高等学校の新設を決意し、昭和33年、高等学校設立準備委員会を発足させた。

教育に適した場所、校地の獲得など結論に至るまで紆余曲折を経て、ついに昭和34年10月、当時の愛知郡豊明町の現在地に決定したのである。敷地は25,000㎡であった。

学校名は創立者の「星」と「城」の思いをくみ入れ、星城高等学校と決定した。

昭和37年５月、豊明町の小高い丘にブルドーザーがうなりをあげて整地工事が始められた。翌38年１月、延べ360坪の鉄筋３階建の本館が広漠たる原野に白亜の殿堂として生まれたのである。そし

て同年４月２日、新入生272人の若人を迎え第１回の入学式を挙行した。

新入生、保護者、教職員あわせて約600人が寒風の吹きすさぶ屋上の開校式において、創立者の意義深い式辞を聞いた。「１.報謝の至誠　１.文化の創造　１.世界観の確立」という「彼我一体」の建学の精神のもと、「感謝のできる実践力に富んだ、逞しい人間の育成」を根本とする教育目標を揚げ、教育は旧来の陋習と惰眠の上に定着してはならない。日々新たにその目標に向って全身全霊を傾けた生活体験によって文化の創造に邁進すべきである。そして、教育を広く高く、かつ深く研究することによって、世界観の確立を期待することが大切であると縷々述べられ、開校されたのである。

昭和38年12月　体育館兼講堂建築完工
昭和39年４月　普通科男女共学開始
昭和40年２月　新館建築完工
昭和44年４月　保育科・女子昼間定時制設置
昭和48年３月　本・新館渡り廊下完工
昭和48年10月　新館４階増築完工
昭和50年12月　創立者石田鏃徳先生逝去
昭和51年１月　石田正城校長就任
昭和51年１月　石田鏃徳先生学園葬
昭和51年３月　第２グランド完成
昭和52年４月　昼間定時制生徒募集中止
昭和52年10月　明徳館完工（第２体育館）
昭和53年８月　第３グランド完成
昭和54年５月　食堂完工
昭和54年８月　仰星館完成
昭和57年３月　３号館校舎完工
昭和57年８月　テニスコート２面完成
昭和57年12月　弓道場完成
昭和59年３月　第２グランド拡張
昭和60年３月　石田記念館建築完工
昭和60年11月　第３グランド改修
昭和61年８月　仰星館増築完工
昭和61年８月　第４グランド完成
昭和62年９月　１・２号館校舎改築
昭和63年10月　南風グランド拡張
昭和63年10月　昼間定時制廃止
昭和63年10月　海外修学旅行（韓国）
平成元年４月　仰星館新館完成
平成２年９月　トレーニングセンター完工
平成３年８月　中庭改装
平成５年２月　男女校舎間袴跨道橋設置
平成５年８月　南館窓枠アルミサッシに改装
平成５年８月　来客駐車場完成
平成６年４月　保育科生徒募集停止
平成６年８月　本館窓枠アルミサッシに改装
平成７年４月　制服改定・実施
平成７年４月　積徳館理科室等全面改修
平成７年８月　積徳館玄関周辺改修
平成８年２月　男子家庭科総合実習室設置
平成８年３月　３号館校舎増設
平成８年８月　１・２号館校舎空調設備設置
平成９年６月　３号館空調設備設置
平成10年４月　食堂全面改修
平成10年４月　国際コース開設
平成11年４月　男女共学制実施

星の城幼稚園

昭和46年11月１日、星の城幼稚園は豊明市二村台の豊明団地内に開園され、今年で30年がたった。

当時、見渡す限りの荒地に幼稚園は建設された。

石田鏃徳は、昭和16年に青少年の錬成道場「明徳学舘」を創立し、長年の教育実践の経験から昭和38年には星城高校を新設、そして昭和44年には保育科を増設した。その保育科の実習の場として幼稚園を開設したのだが「やはり教育は『三つ子の魂百までも』と昔からいわれているように幼児期が一番大切だ、幼児期に人間としての基礎をつくらなくてはいけない」と、かねてより幼児教育の重要性を説いていたので、多年の理念が星の城幼稚園の設立によって生かされたのである。

開園された昭和46年頃から出生率が増加し、園児数は増加の一途をたどり幼稚園は活気に満ちていた。

昭和50年11月23日、星の城幼稚園の５周年記念式典が遊戯室で盛大に行われた。そして園の同窓会「星の子会」の発会式と総会もあわせて行われ、石田鏃徳は多数の卒園児を前にして今後の青少年のあり方を熱心にわかりやすく話した。この記念すべき日から１ヶ月後、先生は残念にも急逝されたが、園児たちにも「はい・ありがとう・ごめんなさい」の教えを残した。それは自立の精神、感謝の心、素直な態度、人間として大切な教えをこの三つの言葉に託したのだが、生前からも折にふれて子供たちに話していた。昭和51年３月、この教えは石碑にきざまれ幼稚園の指針として園庭に建立された。

昭和53年に地域の要望によりスクールバスが運行されるようになった。園児も豊明市全域より通園するようになり、ますます充実した幼稚園になってきた。

昭和54年には幼児期にかかせない体力づくりをめざして遊戯室の上に体育館がつくられることになった。子供たちのための楽しい体育器具が設置され、昭和55年10月13日体育館の竣工式、そして10周年記念式典が行われた。多数の参列者と共にありし日の創立者の偉業を偲んだ。

昭和60年には石田学園の45周年記念式典が星城高校の記念館を中心に行われたが、幼稚園もあわせて15周年記念の行事を盛大に行った。平成２年には創立25周年を迎え、固定遊具「ウータン」が園庭につくられ、この後星の城幼稚園のシンボルとなる。また、平成７年には25周年記念としてサッカー場を整備し、サッカー教室が始まり現在も多くの卒園生、在園児がサッカーを楽しむなど施設面での充実も図っている。

現在、星の城幼稚園も大きく成長し卒園児も約3,000人となり、社会人、学生、生徒として立派に活躍している。園内の設備も年々充実し、安定した園児数で世紀を担う人間形成の基礎として豊かな教育を目指し園内研修、園外研修を充実し積極的に研究発表なども行ない保護者や社会のニーズに応えてきている。

時代は推移し、幼稚園を取りまく環境も著しく変化してきたが幼児一人一人の特性を大切にし、未来にはばたく人間づくりに今、星の城幼稚園は邁進している。

名古屋明徳短期大学

大学設置は先代理事長石田鏃徳の宿願であった。建学の精神「報謝の至誠」「文化の創造」「世界観の確立」の実現を図るためにも当然の願望であるといえる。石田鏃徳の教育理念に共鳴し、教育実践に共感した人たちからの幾度もの協力の申し出があり、そのたびに、大学設立の構想を練られたと伝えられる。教育を聖業と考える石田鏃徳の真摯、謹直な姿勢は、遂に着実、堅固な道を選択して今日に至った。

その偉業を承け継いだ、石田鏃徳の長男である現理事長石田正城は、昭和61年、５年先の昭和65（平成２）年の学校法人創立50周年を迎える記念事業の一環として、大学創設を決意した。

大学の創設は、大学生の急増・急減期を数年先にひかえた時にあっては、文部省の認可は慎重で条件も厳しかった。なかでも、設置場所の選定は重要な条件の一つであった。そこで、大学の創設候補地を、本学園の高校生の出身地が多い、名古屋南東部、三河部、知多北部に求めた。これらの地域は大学進学希望者数に比して私立大学が少なかった。そのとき、たまたま、鉄と洋蘭の街東海市に、大学誘致を掲げての積極的な新しい街作りの動きがあり、かつ東海市も昭和64（平成元）年市制施行20周年を迎えるという奇遇が、大学創設場所を東海市に決定するということに繋がったのである。当初、東海市の候補地は４ヶ所あった。そのうち、早期実現可能で、キャンパスは高台で、交通の便がよく、教育環境にふさわしいことを基準にして、この地を選んだのである。久野市長をはじめ、議会関係者並びに住民から大歓迎を受け、祝福されたのであるが、区画整理事業中の土地故、登記の法律的手続きに悩まされ、地元村瀬銀一氏のご尽力に助けられたことが多々あった。

土地問題についで大学の名称も重要課題であった。名は体を表わすことを熟慮した上で、先代理事長の初志を継承する意を生かし、昭和16年創設の私塾「明徳学舘」の「明徳」を命名することに決定したのである。「明徳」の語は、中国の古典『大学』のテーマであり人間の生得の徳の一つであって、学問はその明徳を磨くことにある、と説く『大学』の精神は、先代理事長の学校設立の意図であり、大学創設の趣旨でもある上に、この荒尾地区の生んだ聖儒細井平洲先生の教えるところでもあり、まさしくふさわしい選択であったといえよう。

しかし，設置学科は、当初、日本文化を併修する「英語科」を考えたのであるが、文部省（現文部科学省）の指導・助言を受ける過程で「英語科」のみとなり、1989年４月に名古屋明徳短期大学として発足することとなった。戦後、学校法人として再出発するに際し、先代理事長が我が国の将来を展望し、国際化時代の到来を見越した英語学修の必要性を説いた、その先見どおりの実現をみることができたのは、何よりの快挙であった。

その後、英語教育とともに更に建学の精神を具現化し世界の文化理解を図るため、1993年４月に国際文化科を増設した。

さらに、1995年４月には名古屋明徳短期大学に学位授与機構認定の二年制専攻科（英語専攻、国際文化専攻）を増設し、短大の一層の充実を図った。

平成元年４月　名古屋明徳短期大学英語科設置
　　初代学長に高橋令二就任
平成５年４月　名古屋明徳短期大学国際文化科増設
平成７年４月　名古屋明徳短期大学専攻科増設
平成11年４月　第二代学長に織田晃就任

星城中学校

昭和16年、創立者石田鏃徳は、自己の苦学の経験から向学心に燃える若者のため、私塾「明徳学舘」を創設し、生徒と寝食をともにした。さらに、終戦の昭和20年、「わが国敗戦の主原因が世界的視野に欠けていたことにあった。」と痛感し、再建日本のためには、世界語である英語を青年諸君に学習させ、広い視野の人材を育成することが急務であると悟り、「名古屋英学塾」を開設した。

その後、学校法人石田学園の認可を受け、一層の充実を図るとともに、戦後の日本を背負うに足る青年育成のため、「感謝のできる実践力に富んだ、逞しい人間」作りを目標に、昭和38年「星城高等学校」を、続いて昭和46年「星の城幼稚園」を設立したが、志半ばで他界した。

創立者が命をかけた「人間づくり」への血の滲む努力を振り返るとともに、生前より創立者の夢でもあった大学法人への進展を図りたいと準備を進め、学園創立50周年の記念すべき年、平成元年に「名古屋明徳短期大学」を開学することができた。

かくして、学園も大木の幹のように、太く逞しく成長してきたが、さらに一段の成長発展を促すべく、学園の将来構想の中で「星城中学校」の設立を計画した。平成元年準備委員会を発足させ、少子化の時代を迎える中で、「建学の精神」に基

づいた新しい中高６ケ年一貫教育の実施を目指し、校地、規模、教育内容などの検討に入った。

平成３年９月私立学校審議会で設置計画の承認をいただき、平成５年４月開校するに至った。現在中央教育審議会で、個性を尊重する教育、能力・適性に応じた教育の推進、高齢化社会に対応する教育など21世紀を展望した教育の在り方について検討がされ、答申が出されている。星城中学校の教育は、このことをすでに先取りした形で進められており、21世紀の幕開けを迎えて、自信を持って星城教育に邁進している。

星城高等学校との６ケ年教育の中で、中高一貫教育進学校としての実績は顕著なものがあり、このことは学園全体の発展に寄与するものと確信している。

平成元年10月	星城中学校設置準備委員会発足
平成３年５月	中学校概要決定
平成３年７月	愛知県へ設置計画書提出
平成３年９月	愛知県私立学校審議会にて設置計画の承認
平成４年３月	校舎起工式
平成５年４月	開校

名古屋石田学園本部

名古屋石田学園の基盤となった明徳学舘が私塾としてスタートした1940年代（昭和16年～24年）は、創立者の思いを具現化した第一歩の時期である。明徳学舘の創設、戦争による閉鎖、そして終戦後すぐに名古屋英学塾として再出発と、新しい芽を苦労して植えつけた時期である。1950年代（昭和25年～34年）は、名古屋英学塾全盛の頃である。学園の経済的基盤が少しずつ安定をして個人の学校から法人へ転換してきた時期である。名古屋英学塾が英語学校と予備校を併設した。

1960年代（昭和35年～44年）は星城高等学校の創設期。創立者の精神を高等学校という場で具現化していった時期である。高校生急増期に合わせて開設したが、その後生徒数の減少により生徒募集で苦労する。開校当初は、進学予備校が開設する高校としておおいにマスコミを騒がせた。

1970年代（昭和45年～54年）は、幼稚園の設置、星城高等学校には保育科及び定時制普通科の設置等学園の総合化による経営基盤の安定化を図った時期である。創立者石田鏇徳の急逝により石田正城が理事長に就任した。

1980年代（昭和55年～64年・平成元年）は、各学校の充実期。星城高等学校では女子校舎、石田記念館、野球場、仰星館の新設、星の城幼稚園では体育館、農園の設置等各施設の拡充を図った時期でもある。また短期大学開学に向けて準備をスタートさせた。そして平成元年開学した。

1990年代（平成２年～11年）は、学園50年の歴史を踏まえて、創立者の建学の精神のもとに「人の和」と「経営基盤の安定」をキーワードに、名古屋明徳短期大学国際文化科及び専攻科の設置、星城中学校の新設による中高一貫教育の開始と、学園の飛躍の土台を形成した。

2000年代（平成12年～）は、学園創立60周年に向けて四年制大学開設の準備を開始し、更なる発展を図りつつある。

昭和16年10月	明徳学舘開設
昭和20年12月１日	名古屋英学塾開設
昭和26年３月30日	学校法人石田学園設立認可申請
昭和26年９月１日	学校法人石田学園設立認可（指令庶第563号）
昭和26年９月１日	設置者変更認可（指令庶第561号）
昭和26年９月18日	学校法人石田学園設立登記
昭和28年９月28日	事業部設立に伴う寄附行為変更認可申請
昭和28年10月５日	事業部設立に伴う寄附行為変更認可（指令学第497号）
昭和37年10月１日	星城高等学校設立に伴う寄附行為変更認可申請
昭和37年12月24日	星城高等学校設立に伴う寄附行為変更認可（37指令学第479号）
昭和38年１月９日	組織変更登記
昭和43年10月21日	星城高等学校定時制課程設置に伴う寄附行為変更認可申請
昭和43年12月21日	星城高等学校定時制課程設置に伴う寄附行為変更認可（43指令学第3-41号）
昭和43年12月26日	組織変更登記
昭和46年８月６日	星の城幼稚園設立に伴う寄附行為変更認可申請
昭和46年12月３日	組織変更登記
昭和62年７月13日	名古屋明徳短期大学設立に伴う寄附行為変更認可申請（愛知県申請）
昭和62年７月24日	名古屋明徳短期大学設立に伴う寄附行為変更認可副申（愛知県62私振第330号）
昭和63年12月22日	名古屋明徳短期大学設立に伴う寄附行為変更認可（文部省地高第32号）
昭和63年12月23日	組織・法人名変更登記
平成３年７月31日	名古屋明徳短期大学国際文化科設置に伴う寄附行為変更認可申請
平成４年10月30日	星城中学校設立に伴う寄附行為変更認可申請
平成４年12月21日	名古屋明徳短期大学国際文化科設置に伴う寄附行為変更認可（文部省校高第50号）
平成５年３月22日	星城中学校設置に伴う寄附行為変更認可（文部省地高第1-10号）